

八 反 切 遺 跡

—工場建設用地造成工事に伴う発掘調査報告—



平成18年3月

彦根市教育委員会

目 次

例言	
Iはじめ	1
II位置と環境	1
III発掘調査の成果	6
基本土層	6
検出遺構	6
出土遺物	22
IVおわりに	26
写真図版	

例 言

- 本書は、彦根市教育委員会が平成17年度に工場建設用地造成工事に伴って実施した発掘調査の成果をまとめたものである。
- 本調査の調査地は、彦根市野田山町字八反切750-1ほかに位置する。
- 本調査は、平成17年2月8日・9日に試掘調査を実施したところ遺構を確認したため、同年4月25日～6月23日まで現地調査を実施し、7月11日～10月28日の間、資料整理を行った。
- 本調査は、彦根市教育委員会文化財課が実施した。平成17年度の調査の体制は下記のとおりである。
【平成17年度】

課長：花木 勉	課長補佐（兼史跡整備係長）：尾崎 洋
主査：北村 義仁	副主幹（兼文化財係長）：西田 哲雄
主査：谷口 徹	主任：水谷 千恵
主任：志賀 昌貴	臨時職員：早川 圭
- 本調査には以下の諸氏が参加した。吉原正興、高田慶子、中川浩行、清水啓邦、元井義勝、田附清子、野瀬善一、田川智子（財団法人滋賀県文化財保護協会嘱託）、中店和志、神谷麻未、櫻田小百合、菅納直人、杉原宏太、竹内真奈美、谷川真知子、東郷美香、野木直人（以上滋賀県立大学学生）
- 本書は谷口と早川が執筆した。
- 本書で使用した方位は、注記がない場合は平面直角座標第Ⅳ系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づいている。
- 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。

I はじめに

本書は、民間の工場建設用地造成工事に伴って実施した八反切遺跡（彦根市野田山町字八反切750番-1、同751番-1、同752番-1、同753番-1、同754番-1、同755番-1、同756番-1、同757番-1、同758番の一部の所在）の発掘調査の成果をまとめたものである。調査は、開発面積9,867.59m²について、平成17年2月8日・9日の両日、30箇所に2m×2mのトレーニングを設けて試掘調査を実施した結果、9箇所のトレーニングで柱穴や溝などの遺構を確認した。そのため開発業者と協議を行い、同年4月25日から6月23日まで本発掘調査を行った。その後、7月11日から10月28日まで整理作業を行って本報告書の刊行となった。

今回の調査にあたっては、開発業者を始めとする関係者にご理解とご協力を賜り、重機の手配などにおいてもご尽力を願った。厚くお礼を申し上げたい。

II 位置と環境

八反切遺跡は、滋賀県彦根市野田山町に位置する古墳時代から奈良時代の遺跡である。

鈴鹿山系の北端に位置する靈仙山（標高1094m）に源を発する芹川は、石灰岩地帯を流れ、多賀町栗栖付近で山地を抜け出し扇状地を形成する。その北岸は、芹川の河岸段丘とその北方からのびる鈴鹿山系の末端をなす丘陵にはさまれ、上流の多賀町久徳付近から下流の彦根市地蔵町付近まで幅1km未満の細長い平地となっている。

この平地は決して広くはないものの、八反切遺跡の上流側に隣接する木曾遺跡では後述するように顯著な遺構・遺物が確認されており、縄文時代から人類の活動があったことが判明している。

八反切遺跡は、東側で現在の彦根市と犬上郡多賀町の境界線に接しており、芹川から分流した赤田川がその境界となって、多賀町側には中川原工業団地が造成されている。南側は芹川の旧流路の痕跡をはさんで河床に向かって下降している。北側には国道306号の開通以前には彦根方面と芹川上流をつなぐ主要な道であったと考えられる里道が通過している。

湖東北部地域で最古の縄文時代遺跡は、琵琶湖岸に近い礎山城遺跡や屋中寺廃寺遺跡で早期の高山寺式が出土している。犬上郡域のうちでは縄文時代前期の大歳山式が出土している福満遺跡があり、後期・晩期にも多量の遺物が出土している。福満遺跡と同じ犬上川流域にある土田遺跡・小川原遺跡・金屋遺跡・北落遺跡や、芹川流域にある久徳遺跡・松原内湖遺跡も後期・晩期の遺跡であり、土田遺跡・小川原遺跡・久徳遺跡では甕棺墓や集石遺構が確認されている。このように前・中期の土器が出土する遺跡はあるが、遺構を伴うような遺跡は後期以降に偏るようである。

弥生時代には、前期の遺物が犬上川扇状地の扇頂に近い金屋遺跡・北落遺跡で確認されているが、これらは縄文時代を中心とする遺跡であり弥生中期以降に継続するものではない。

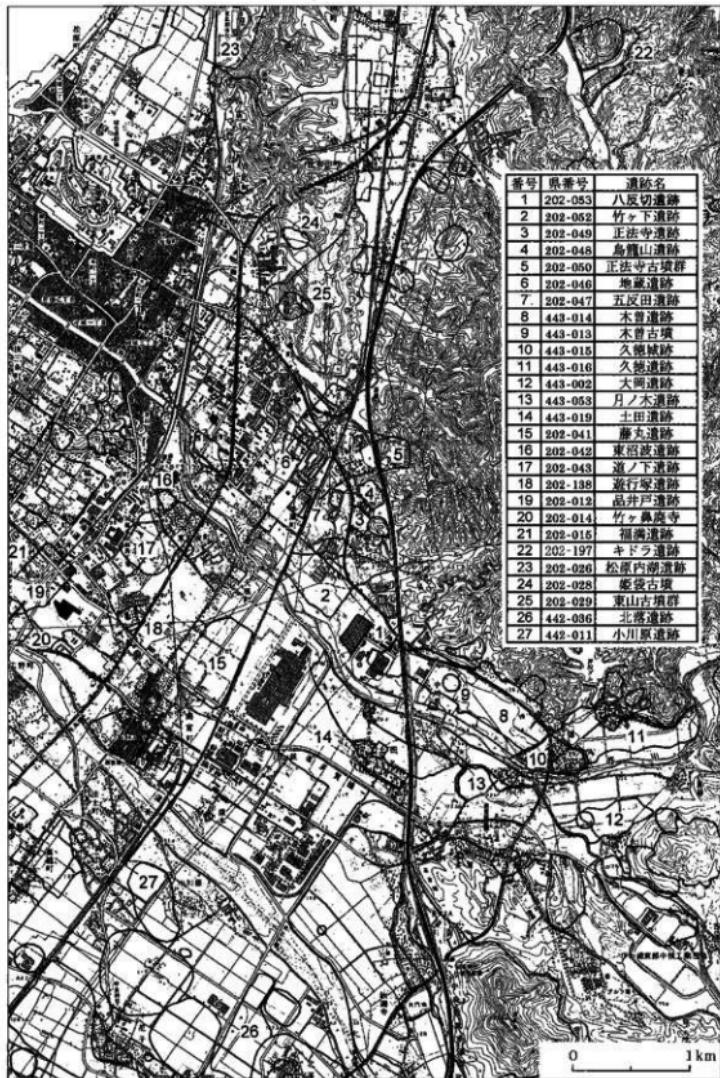


図1 八反切遺跡位置図

弥生時代の遺跡の多くは、前期では稻里遺跡や竹ヶ鼻廃寺遺跡・中期では妙楽寺遺跡・川瀬馬場遺跡・肥田西遺跡など、犬上川や宇曾川の扇状地の扇端より下流に分布する傾向がみられる。この現象は扇状地の伏流水が扇端において噴出し湧水となることと、当時の農耕における灌漑技術が密接に関連していることを示しているのであろう。

弥生時代の後期から古墳時代に入ると、扇状地の開発が急速に進行する。芹川流域では南岸の藤丸遺跡・土田遺跡や北岸の木曾遺跡など、扇端より高位にある遺跡で庄内～布留式期の土器や竪穴住居が検出されている。同じ頃、扇端よりも低位にあたる品井戸遺跡・福満遺跡・横地遺跡でも集落が確認されており、琵琶湖岸にそびえる荒神山に築かれた荒神山古墳成立の基盤をなすような集落群が広がっていたものと思われる。

古墳時代後期には木曾遺跡で大壁造りの建物からなる集落が営まれ、八反切遺跡周辺では木曾古墳や馬具が出土している正法寺古墳群・東山古墳群・姫袋古墳など後期古墳群が形成された。また、時期は不明であるが遺跡西北方の鞍掛山（大堀山）では埴輪の出土が確認されており、鞍掛山上にも古墳が構築されていた可能性が極めて高い。

飛鳥・奈良時代に入ると、周辺の各遺跡で掘立柱建物などの遺構が多く確認されるようになるほか、高宮廃寺（遊行塚遺跡）・竹ヶ鼻廃寺などの古代寺院が建立され、芹川北岸では瓦陶兼業窯である正法寺瓦窯（鳥籠山遺跡）、製鉄遺跡であるキドラ遺跡が確認されている。なお、竹ヶ鼻廃寺遺跡では奈良時代後半以降に寺院を廃して大型の掘立柱建物群が形成され、犬上郡衙の比定地となっている。このように犬上郡とその周辺では、集落・寺院・官衙・生産と遺跡の種類・数ともに増える傾向がみられる。

また、八反切遺跡は犬上郡のうち駅家郷に属していたと考えられるが、駅家郷の名が示す通り遺跡の西北西約1kmには、壬申の乱における古戦場の鳥籠山と言われている鞍掛山があり、その周辺が古代東山道の鳥籠駅に比定されている。

中世には室町時代に地頭の赤田氏によって、芹川北岸の灌漑用水である赤田川が整備されたと伝わる。戦国時代に入ると坂田郡・犬上郡・愛知郡は江南の六角氏と、江北の京極氏・浅井氏による南北抗争の緩衝地帯となる。芹川流域には在地土豪の久徳氏や小林氏・土田氏があって、彼らの支配が行なわれていたと考えられる。このうち野田山町には、野田山城跡が遺跡として記載されているがその詳細は不明な点が多い。

さて、芹川流域のうち、八反切遺跡よりも下流側の遺跡については、湖岸に近い松原内湖遺跡を除いてほとんど明らかでない。それに比べて、上流側に位置する木曾遺跡では、近年発掘調査が進められ各時代の様相が明らかになってきている。

木曾遺跡では溝の埋土から出土した縄文時代中期の土器片を最古とし、弥生時代にかけては遺構・遺物とも確認されていない。古墳時代前期の竪穴住居群からは小型仿製鏡の破片や東海系のS字状口縁台付甕が出土している。また、同じく溝からも北陸系の月影式の甕が出土している。

古墳時代後期には渡来系集団との関わりが指摘されている大壁造建物や竪穴住居からなる

集落が営まれ、横穴式石室を有する古墳や木棺墓・土坑墓など墓地も確認されている。また、八反切遺跡で主要な遺構を検出した奈良時代になると、7世紀後半～8世紀前半に堅穴住居群、8世紀後半から10世紀前半には掘立柱建物群が確認され、集落における建物の変換がみられる。後者では墨書き土器や円面鏡が出土している。さらに12世紀には土師器皿が埋納された土坑が確認されている。これら木曾遺跡の調査成果は、中川原工業団地を隔てていると言え、八反切遺跡の調査成果と重複する部分が少なくない。

芹川北岸地域のうち、彦根市域における本格的な発掘調査は、丘陵上にある正法寺瓦窯（鳥籠山遺跡）を除いて、平地では八反切遺跡が初めてのものである。本調査の成果を、久徳遺跡や前述の木曾遺跡の調査成果と合わせて分析することで、芹川流域の歴史がますます明らかになるものと期待される。

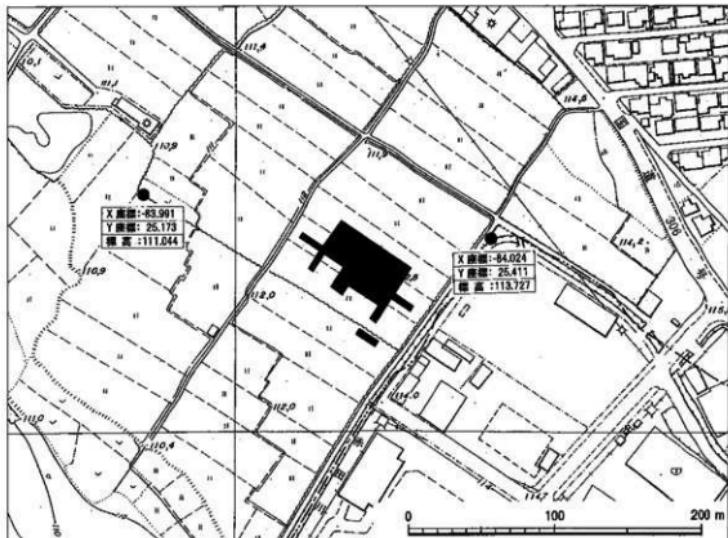


図2 調査トレンチ設定図

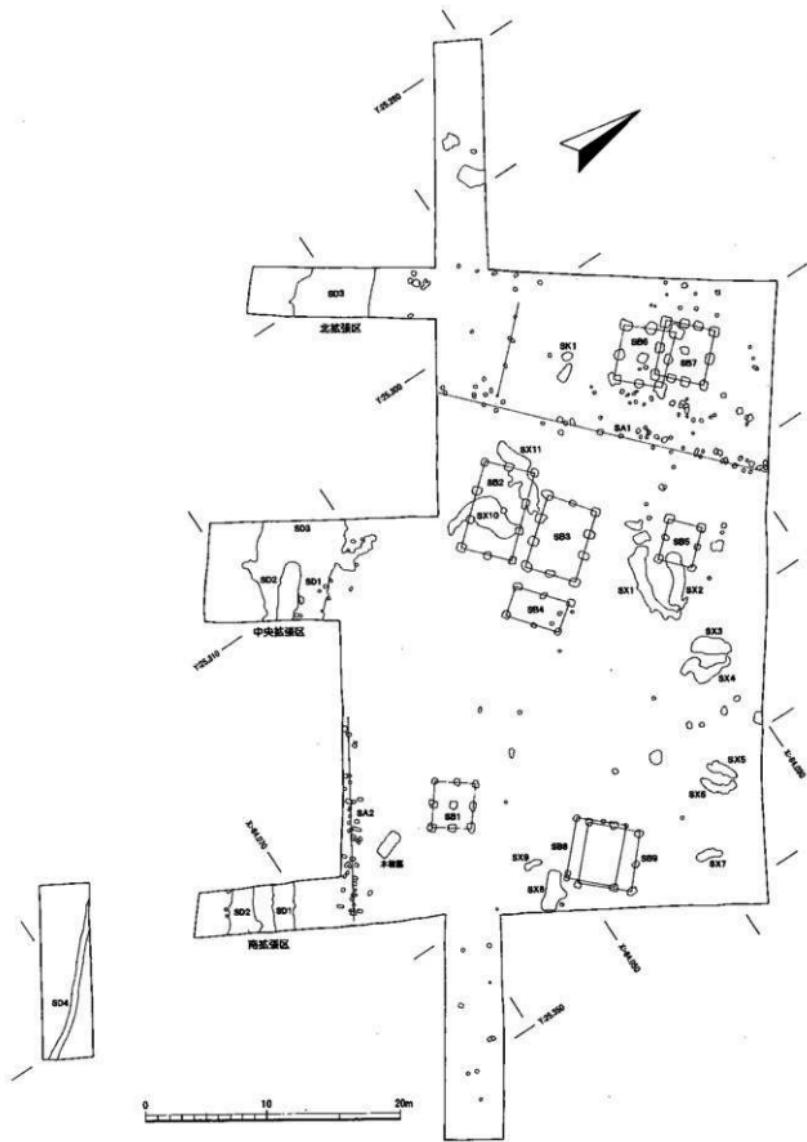


図3 遺構全図

III 発掘調査の成果

基本土層

調査地は、標高112m前後の扇状地上に形成された水田に位置している。水田の耕作土を除去すると、黄褐色の床土があり、次いで黒褐色粘質土が標高の低い北側に厚く南側ではほとんど確認できない様相で層を形成していた。黒褐色粘質土層は、後述する各遺構の切り込み面であることが土層の観察により判明しているが、遺構の色質に極めて近似しており平面での遺構検出は実際には困難であった。そのため、やむなく黒褐色粘質土を削平し、さらに下の地山である黄灰褐色粘質土層まで掘り下げて遺構検出を行った。この地山に到達するまでの深さは、およそ40cmから50cmであった。

黄灰褐色粘質土層は比較的安定した地山であったが、調査地の中央の幅約30m間では、東西方向に砂礫の混入が著しく、この地山形成期に洪水等に起因する急激な土砂の流入があったことを物語っていた。なお、深く掘り下げた遺構の調査により、黄灰褐色粘質土層は1mを越える厚さで堆積しており、その下に砂礫層が広がっていることを確認した。

検出遺構

試掘調査により開発地の9箇所で柱穴や溝などの遺構を確認したため、遺構のもっとも集中する箇所を起点に幅約5mのトレンチを四方に広げて遺構の広がりを追認することにした。その結果、起点部を中心として特に北東側に遺構が広がっていることが判明し、遺構の広がりに応じてトレンチを順次拡張したところ、開発区域の北東寄りのおよそ2,200m²で遺構を確認し調査域とした。

今回の調査で検出した遺構は、古墳時代前期から中世前期に及んでいる。まず、古墳時代前期の不定形な土坑(SX1～SX11)が構築される。その後、古墳時代後期には木棺墓1基が築かれ、奈良時代後半になると掘立柱建物9棟(SB1～SB9)・橋(SA1・SA2)・溝(SD1～SD4)などの各種遺構が築かれて盛期を迎えた。時代ごとに詳述することにしよう。

【古墳時代前期の遺構】

不定形土坑(SX1～SX11:図4・5)

この時代の遺構として、不定形な土坑11基を検出した。土坑は平面の形態が不定形な弧状を呈するものが多く、断面は30cmから40cmの比較的浅い椀状を示している。土坑内の堆積土は、いずれも①黒灰褐色粘質土、②茶灰褐色粘質土の2層からなる。①層には焼土や炭化物片の混入が見られるが多く、②層は地山の流入により形成された土層である。①層中より同期の土器細片が数点出土している。SX10(図5)では、①層の最下部で炭化した板材を検出した。板材の厚さは約1cm、幅は約20cmから30cmである。

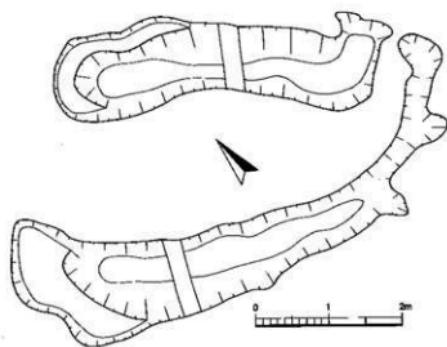


図4 不定期土坑 (SX1 [下] と SX2 [上])

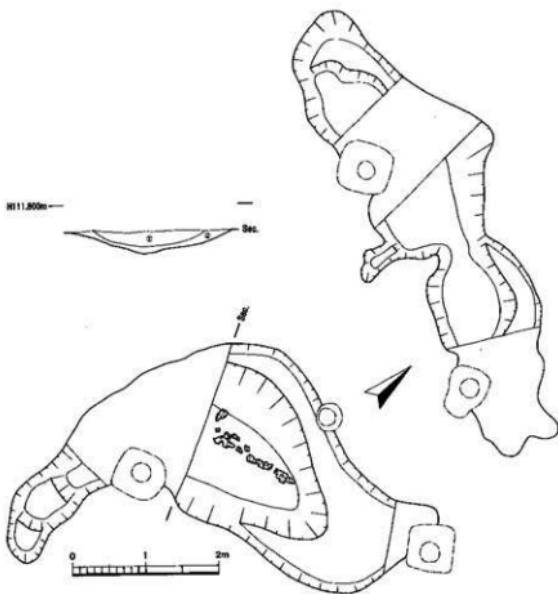


図5 不定期土坑 (SX10 [下] と SX11 [上])

これらの土坑は、SX7を除くと、SX1とSX2、SX3とSX4、SX5とSX6、SX8とSX9、SX10とSX11が、それぞれ対をなすように築かれている。さらに、これらの土坑の全体を見ると、およそ径30mの円弧を描くように構築されているようである。構築の意図や用途は不明である。

【古墳時代後期の遺構】

木棺墓（図6）

古墳時代後期（6世紀末）の遺構は唯一この木棺墓のみである。調査域の南隅近くで検出したもので、平面プランは長さ2.3m、幅1.0mの長方形を呈している。墓坑を四分する形でセクション帯を残して、断面を観察しながら順次掘り下げていった。その結果、長方形の各辺で、木製の棺材の腐食した痕跡と考えられる⑦暗黒褐色粘質土を確認した。いずれも厚さ5cm前後で、やや外反気味に直立している。側板2枚と小口板2枚を合わせて箱状にしていたと考えられる。側板と小口板が接する四隅は、いずれかが突出することなくL字形に納めている。ただ、北側の小口板の場合、それが設置された下端中央に窪みがあり、小口板の痕跡は窪みの底にまで到達していた。小口板は四角形ではなく、下端中央のみ突出するT字形の板材であった可能性も考えられる。

箱状の木棺を墓坑に納めたその外側、つまり板材と墓坑との間には、⑧淡黒灰褐色粘質土や⑨黒灰褐色粘質土が充填されている。⑧⑨両層とも地山のブロック状混入が著しい。

次に底板および蓋板であるが、⑦層に近似する⑤層の黒灰褐色粘質土が底板か蓋板の痕跡

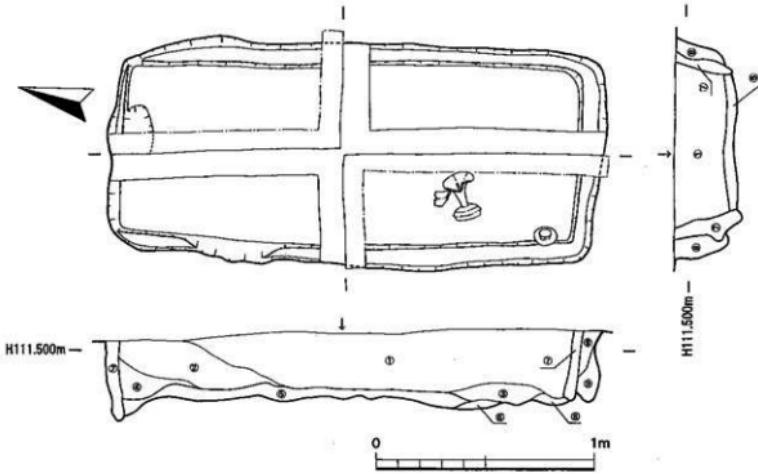


図6 木棺墓

であろう。後述する供獻土器の出土状態などから推測すると蓋板の可能性が高い。一方で底板についてはなかった可能性も考えられる。⑤層の直下の数箇所で、繊維質のものが底に貼り付くように出土した。劣化が著しくて取り上げるまでは至らなかつたが、遺体を包んでいた布、あるいは棺の底に敷かれた敷物などではなかつたかと考えられる。なお、⑤層の下の墓坑底部は、かなり凹凸が著しかつた。墓坑を掘削した際の痕跡であろうか。

⑥層の上に堆積しているのが①～④層である。①黒褐色粘質土層、②淡黒褐色粘質土層、③黒灰色粘質土層、④黒灰褐色粘質土層と地山の混入土の各層である。⑤層が蓋板であったと考えると、これらの層は蓋板の陥没後に流入した土層である。①層内には焼土や炭化物片が多く含まれており、図6に示した供獻土器と考えられる3点の須恵器（有蓋高壺1、短頸壺2）も、この層内から出土品した。当初は墓上に供えられ、葬送に用いられたのであろう。焼土や炭化物片なども葬送の実際を物語る資料であるのかもしれない。

【奈良時代後半の遺構】

掘立柱建物（SB1～SB9）

調査区より、おおよそ方位を同じくする掘立柱建物9棟を検出した。これらの建物の特徴をまとめたものが表1である。この表を補う形で各建物ごとに詳述しておこう。なお、各掘立柱建物の掘り方と柱穴の埋土は同じで、掘り方には黒褐色粘質土が充填され、一部に地山のブロック状混入が認められた。また柱穴には、灰色と粘性を強めた黒灰褐色粘土が流入していた。

SB1（図7）

調査区南端近くで検出した掘立柱建物である。棟の方位は、磁北でN-44°-Wを示し、他の建物と比べてやや西に振れている。桁行2間（3.7m）×梁間2間（3.2m）の總柱建物である。柱間は、図に数字で示したように若干の差異があるもののほぼ規則的である。柱通りも北西辺の2柱穴がやや東にずれている他はすべて良好である。建物の柱穴本体は直径20cmから30cm、掘り方は方形が主流であるが、不定形な梢円形プランのものも存在する。掘り方の一辺は70cm前後と比較的大型である。この掘り方の一辺の一部が外側に弧状に張り出したものが4柱穴あるが、柱を倒す際の痕跡であるのかも知れない。

SB2（図8）

調査区中央のやや西寄りで検出した掘立柱建物である。SX10やSX11を切り込んで構築されている。棟の方位は磁北でN-34°-Wを示す。桁行3間（7.2m）×梁間2間（4.3m）である。柱間はほぼ規則的で、柱通りも比較的良好である。建物の柱穴本体は直径20～30cm。掘り方は一辺が70cmの方形が主流であるが、円形に近いプランを示すものも並存している。この掘立柱建物では、建物のほぼ中央に柱穴を1基検出している。長棟を支える支柱であろうか。柱穴の直径は他と変わらないが、掘り方は小さな円形である。P1より土師器の碗の破片、P2より土師器の壺の破片など、P3より土師器の碗の破片、P4より土師器片と須恵器片、P5より土師器片、P6より土師器の碗と壺の破片など、P7より土師器の壺の破片が

柱方向	方位(磁北)	柱行	間隔	柱間	柱通り	掘り方		柱穴 直径	備考	
						形状	寸法			
SB1	南北	N - 44° - W	2間 (3.7m)	2間 (3.2m)	ほぼ規則的	ほぼ良好	方形が主流	70cm±	20~30cm	鉛柱
SB2	南北	N - 34° - W	3間 (7.2m)	2間 (4.3m)	ほぼ規則的	ほぼ良好	方形が主流	70cm±	20~30cm	建物中央に柱1
SB3	南北	N - 32° - W	3間 (6.0m)	2間 (4.4m)	ほぼ規則的	ほぼ良好	方形が主流	70cm±	20~30cm	
SB4	東西	N - 63° - E	2間 (4.7m)	間 (2.5m)	ほぼ規則的	やや不良	方形が主流	50~70cm	20cm±	
SB5	南北	N - 33° - W	2間 (3.5m)	2間 (2.7m)	ほぼ規則的	ほぼ良好	方形が主流	50~70cm	20cm±	
SB6	南北	N - 37° - W	2間 (4.7m)	2間 (4.1m)	ほぼ規則的	ほぼ良好	不定形が主流	70~100cm	30cm±	鉛柱
SB7	南北	N - 36° - W	2間 (4.7m)	3間 (4.1m)	ほぼ規則的	ほぼ良好	方形が主流	70cm±	20~30cm	建物中央に柱1
SB8	南北	N - 38° - W	2間 (5.1m)	2間 (4.1m)	ほぼ規則的	ほぼ良好	方形が主流	50~70cm	20cm±	
SB9	南北	N - 40° - W	2間 (5.0m)	2間 (4.2m)	ほぼ規則的	やや不良	方形が主流	70cm±	20cm±	

表1 掘立柱建物一覧

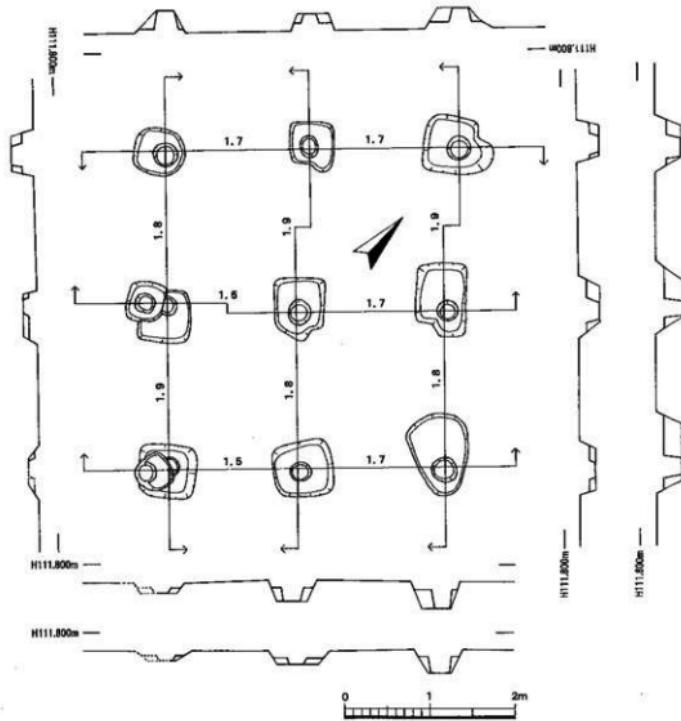


図7 掘立柱建物 (SB1)

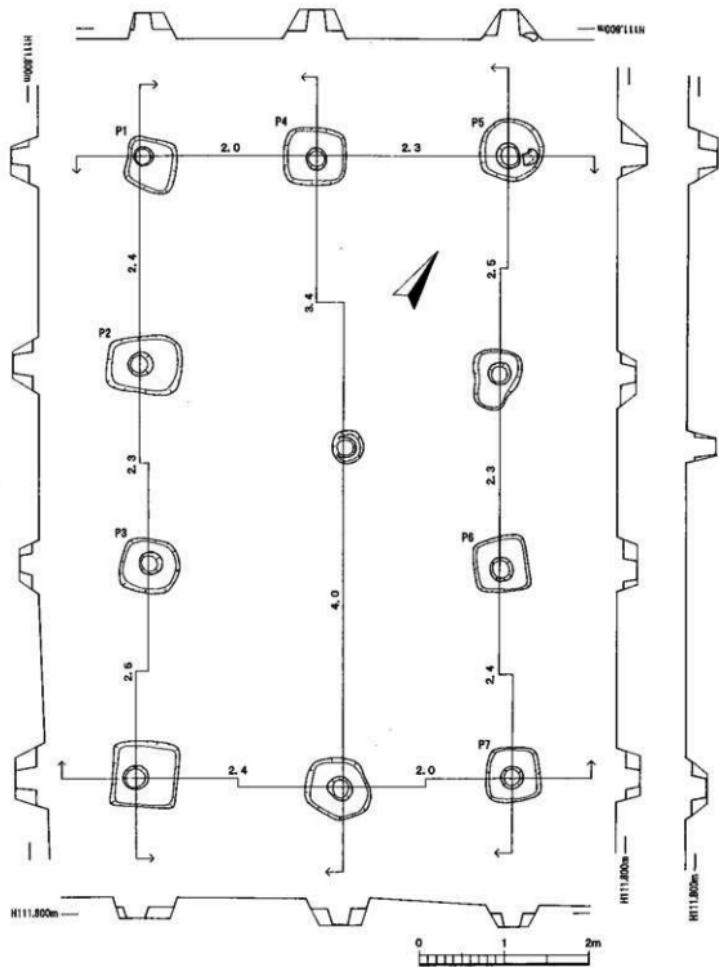


図8 掘立柱建物（SB 2）

それぞれ出土した。

SB 3 (図9)

SB 2 に並行してすぐ東側で検出した掘立柱建物である。棟の方位は磁北で N-32°-W を示す。桁行 3間 (6.0m) × 梁間 2間 (4.4m) である。柱間はほぼ規則的で、柱通りも比較的良好である。建物の南側の柱通りは、SB 2 の南側柱通りにはほぼ連なっている。建物の柱穴本体は直径20~30cm。掘り方は一辺が70cmの方形が主流であるが、梢円形プランを示すものも並存している。P1より土錘2点、P2より土師器片や土錘2点、P3より土師器の壺の破片や須恵器片、P4より土師器の甕の破片や須恵器の蓋の破片、P5より土師器の壺の破片、P6より土師器の壺の破片や土錘4点、P7より土師器の甕の破片、P8より土師器の壺や甕

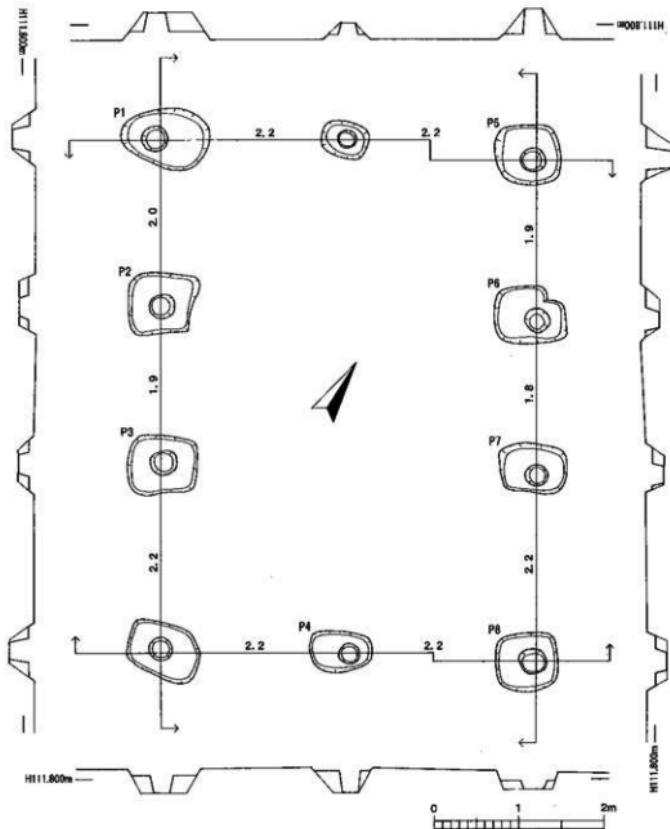


図9 掘立柱建物 (SB 3)

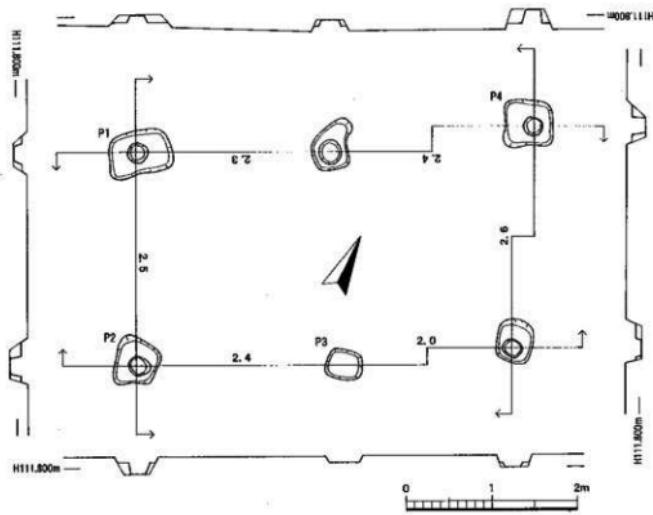


図10 掘立柱建物 (SB 4)

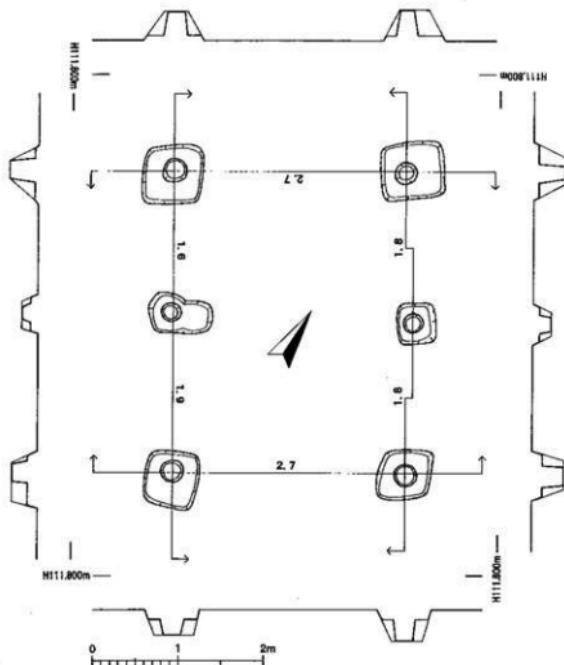


図11 掘立柱建物 (SB 5)

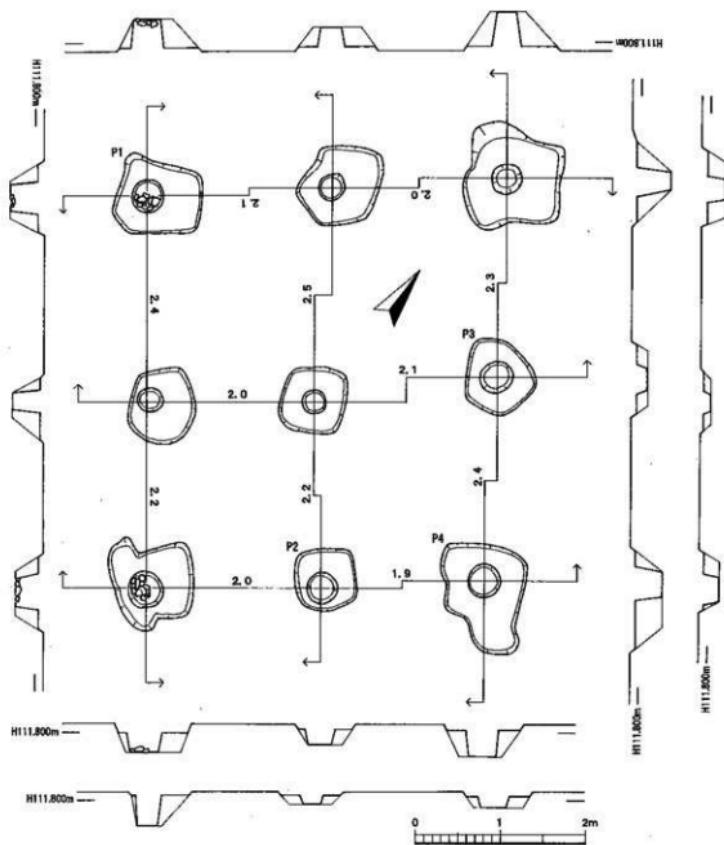


図12 掘立柱建物 (SB 6)

の破片と土錐1点など、掘立柱建物としては比較的豊富な遺物が出土した。中でも土錐が合計9点出土したのは留意される。

SB 4 (図10)

SB 3の南側にSB 3の南辺と並置するように築かれた掘立柱建物である。ただし棟は東西棟で、その方位は磁北でN-63°-Eを示す。桁行2間(4.7m)×梁間1間(2.5m)の小規模な建物である。柱間はほぼ規則的で、柱通りも東辺が北に若干ずれる以外は良好である。建物の柱穴本体は他の建物より一回り小さい直径20cm前後、掘り方は一辺が50cmから70cmとややばらつきがある。掘り方の形状は方形が主流で、北辺中央の柱穴は北隅が外側に弧状に

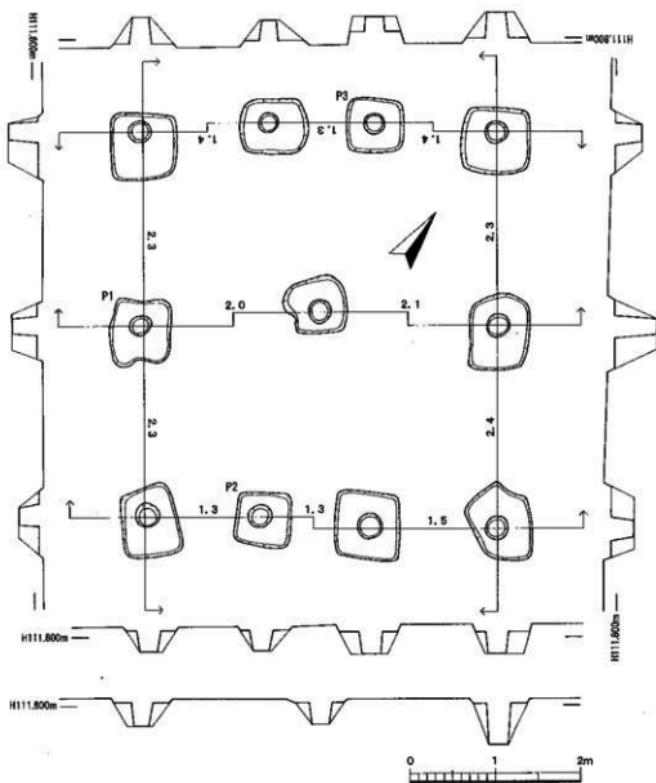


図13 掘立柱建物 (SB 7)

張り出している。SB 1 の例に同じく柱を倒す際の痕跡であろうか。P1 より土師器の壺の破片、P2 より土師器・黒色土器の塊の破片、P3 より土師器片、P4 より土師器の壺や壺の破片と土錐1点がそれぞれ出土している。

SB 5 (図11)

調査区中央のやや東寄りで検出した掘立柱建物である。SB 4 と同じく、桁行2間(3.5m) × 梁間1間(2.7m)の小規模な建物である。棟の方位は磁北で N-33°-W を示している。柱間はほぼ規則的で、柱通りも比較的良好である。建物の柱穴本体は他の建物より一回り小さな直径20cm前後、掘り方は四隅を一辺70cmと大きく深くして、中間を一辺50cmと小さく浅

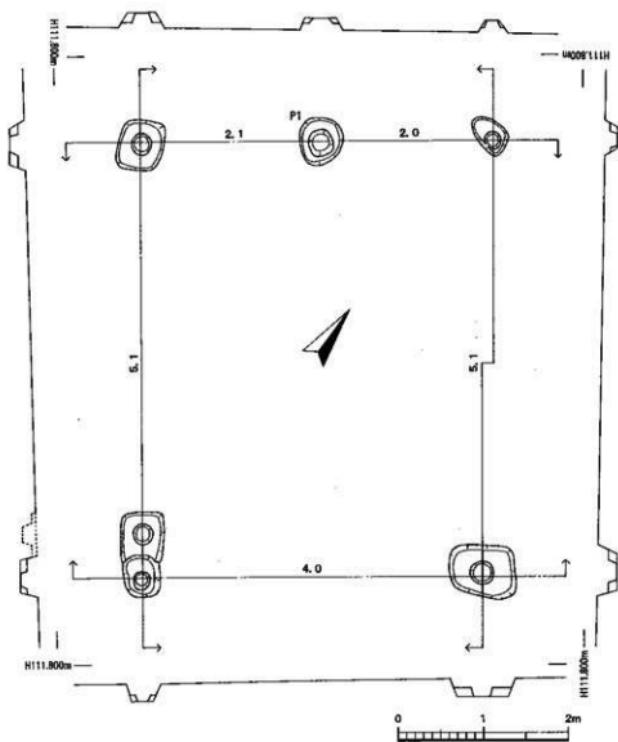


図14 堀立柱建物 (SB 8)

くしている。掘り方の形状はほぼ方形に統一されている。

SB 6 (図12)

調査区の北側で検出した総柱の堀立柱建物である。棟の方位は磁北で N-37°-W を示す。桁行2間(4.7m)×梁間2間(4.1m)である。柱間はほぼ規則的で、柱通りも比較的良好である。建物の柱穴本体は他の建物より一回り大きく直径30cm前後あり、掘り方も一辺が70cmから100cmを計測する。西隅と南隅の柱穴の底には、径10cm前後の円礫を敷いて柱の沈下を防ぐ工夫もなされていた。総柱の建物であること、柱穴・掘り方とも通常の建物より規模が大きいこと、そして柱穴に沈下を防ぐための工夫が施されていることなどを考慮すると、この建物は米などの重量物を備蓄する倉庫であった可能性が高い。ただ、掘り方の形状は明確な方形が少なく、不定形プランのものが主流をなしている。P1より須恵器片、P2より須恵器片と土師器片、P3より土師器片、P4より土師器片が出土した。

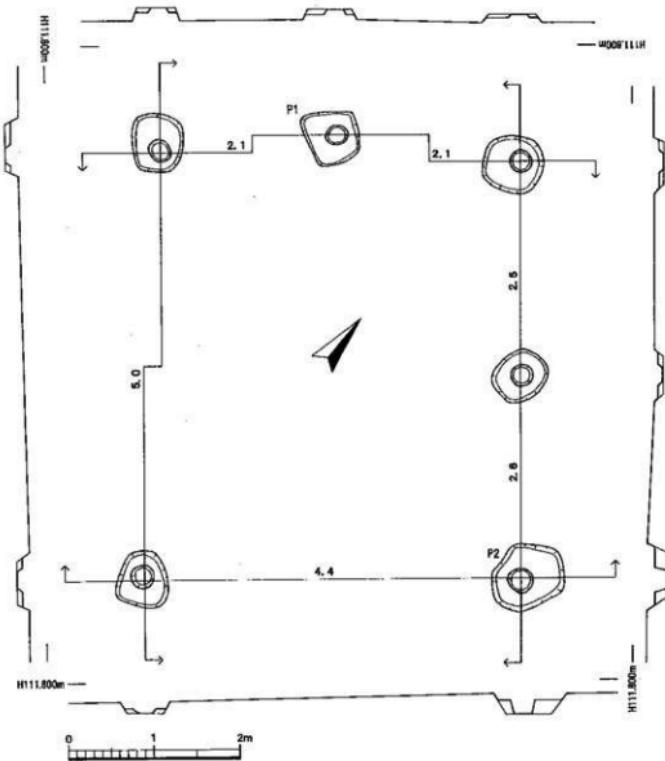


図15 挖立柱建物 (SB 9)

SB 7 (図13)

SB 6 と建物西側を重複させる形で検出した掘立柱建物である。棟の方位は磁北で N-36°-W を示す。桁行 2 間 (4.7m) × 梁間 3 間 (4.1m) である。柱間はほぼ規則的であり、柱通りも比較的良好である。建物の柱穴本体は直径 20~30cm。掘り方は一辺が 70cm 程度の方形が主流であるが、不定形な形状を示すものも存在している。

なお、この建物は梁間 3 間の距離が極端に短い。本来ならば 2 間でよいところをあえて 3 間にした配慮である。因みに梁間が 2 間であれば、建物中央の柱穴とともに一般的な総柱建物となる。梁間をあえて 3 間としたのは、総柱建物をさらに補強する意図があったのかもしれない。SB 6 とは重複関係にあるものの柱穴の切り合い関係がないため新旧を判別し難いが、重量物を備蓄する倉庫という共通の目的で立て替えられた可能性が考えられる。

P 1 より土師器片、P 2 より土師器片と須恵器の壺の破片、P 3 より土師器片がそれぞれ出

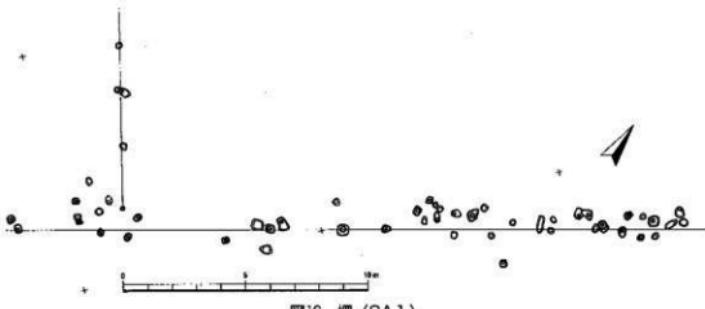


図16 棚 (SA1)

土した。

SB 8 (図14)

調査区南東端近くで検出した掘立柱建物である。桁行は中間の柱穴が未確認であるが、2間(5.1m)程度、そして梁間も2間(4.1m)の建物である。棟の方位は磁北でN-38°-Wを示している。柱間は3柱穴が未確認ながらほぼ規則に存在していたと考えられ、柱通りも同様である。建物の柱穴本体は他の建物より一回り小さい直径20cm前後、掘り方は一辺が50cmから70cmとややばらつきがある。掘り方の主流は方形であるが、楕円形や円形に近いものも存在している。P1より須恵器の壺の破片が出土した。

SB 9 (図15)

SB 8と大きく重なる形で検出した掘立柱建物である。SB 8との新旧関係は不明。棟の方位は磁北でN-40°-Wを示している。桁行2間(5.0m)×梁間2間(4.2m)の建物である。柱間は2柱穴を未検出だが、ほぼ規則的に存在したと推測され、柱通りも同様である。建物の柱穴本体は他の建物より一回り小さい直径20cm前後、掘り方は一辺が70cm前後の方形が主体であるが、一部に不定形なものも存在する。P1より須恵器の壺の破片、P2より土師器の壺の破片が出土した。

以上、9棟の掘立柱建物について個別に詳述したが、これらを概観すると、各建物とも柱通りは比較的良好ではあるが、柱間については1.5~2.7mの間で不揃いが多く、いまだ基本となる尺度が確立していたとは考え難い。また、建物構造に注目すると、次のように識別される。まず、周間に柱列を巡らせた一般的な掘立柱建物であるSB 3・SB 4・SB 5・SB 8・SB 9の5棟。総柱建物であるSB 1・SB 6の2棟。残るSB 2・SB 6の2棟は周間に柱列を巡らせるとともに、建物中央にも柱を立てていたと考えられる建物である。ただ、SB 2は3間の長棟を支える支柱であった可能性が高く、あくまで一般的な掘立柱建物を補強する構造と理解される。それに対してSB 6は本来が総柱の建物であり、対する2辺の柱数を増やしたものであった。したがって、SB 2は一般的な掘立柱建物へ、SB 6は総柱の掘立柱建物

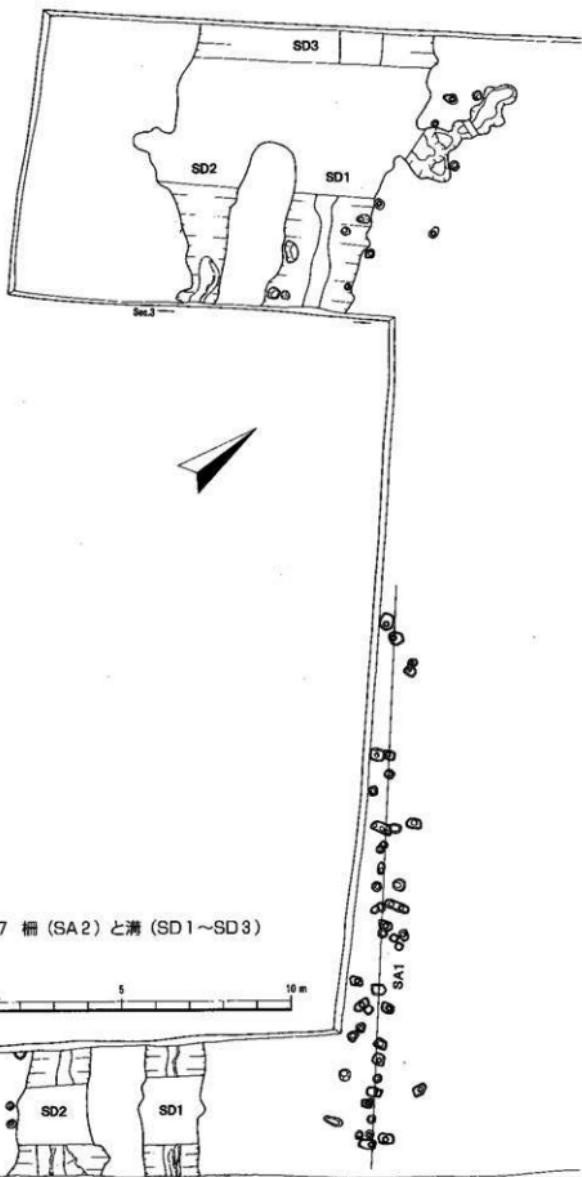


図17 棚 (SA 2) と溝 (SD 1~SD 3)

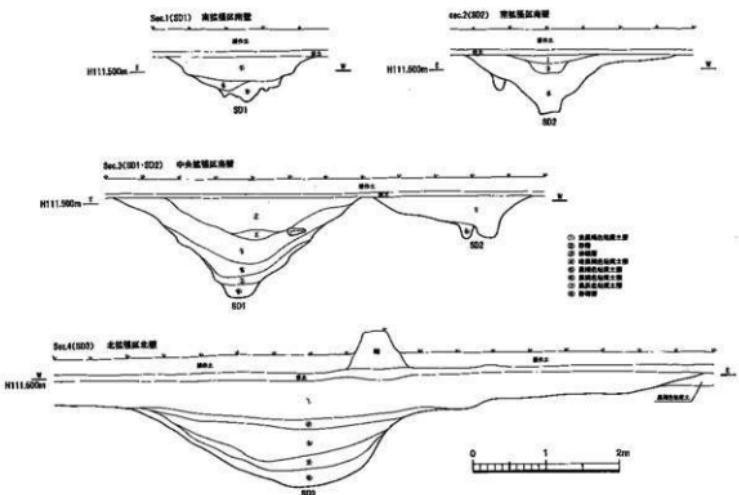


図18 溝 (SD1～SD3) 断面図

へ分類することにより、SB 2・SB 3・SB 4・SB 5・SB 8・SB 9の6棟の一般的な掘立柱建物と、SB 1・SB 6・SB 7の3棟の縦柱の掘立柱建物に二分される。

次に、これら掘立柱建物の集落としての建物構成であるが、出土した遺物が限られており、また偏りがあるため、遺物を根拠に時間的な尺度で建物構成を検討することはむずかしい。そこで建物の方位や空間配置などを根拠に分類すると、SB 1・SB 8・SB 9の建物群とSB 2～SB 7の建物群が想定される。もちろん両群とも建物に重複があり、両群に時間的な幅を持たせた上で考える必要があるが、ともに一般的な掘立柱建物と縦柱の掘立柱建物をセットとした建物構成が想起される。それは居住と備蓄（倉庫）という2つの機能をセットとする建物構成でもあるが、両群が時間の推移によるものか、それとも並存する2つの建物構成であったのか、現状では結論を出すまでに至らない。

柵 (SA1・SA2 : 図16・17)

調査区の北側と南端で検出した柵と考えられる小柱穴列である。調査区の北側で検出したSA 1は、先述のSB 2～SB 7の建物群の居住空間と倉庫空間、つまりSB 2～SB 5とSB 6・SB 7を画するように築かれた柵で、およそN-55°-Eの方位（磁北）を示している。このSA 1は、調査区の西端近くで北へ向うもう1つの柵を付設している。柱穴内より須恵器の蓋の破片や土師器の塊の破片が出土した。SA 2は調査区南端で検出した柵である。東のSB 1の建物にはば並行するN-50°-Wの方位（磁北）を示している。これら柵の小柱穴は直径10cm程度のものが多く、埋土には黒褐色粘質土と黄褐色粘質土の微妙に異なる両者が識別され、幾度かの作り替えがあったものと思われる。

溝 (SD 1 ~ SD 4 : 図17・18・19)

調査区で4条の溝を検出した。いずれも掘立柱建物や槽とほぼ並行し、南から北へ流路を刻んでいる。

SD 1 は SD 2 とともに調査区の南拡張区と中央拡張区で検出した溝である。南拡張区では幅約2m、深さ約0.6mで断面が塊状を呈しているが、中央拡張区では幅約3.4m、深さ約1.4mの断面V字状に大きく成長し、SD 2 と合流して SD 3 の流れの主流を形成している。溝の堆積土は、粘質土が主体であるが、砂層(②層)や砂礫層(⑧層)も確認され、時には激しい流れがあったことを物語っている。特に溝底に堆積した⑧層の砂礫層には直径が20~30cmの大型の礫が多く混入しており、溝底に幾条もの礫の爪痕を残している。なお、SD 1 と SD 2 が合流する辺りで、SD 1 に北から不定形な溝が流入しているが、その流入箇所の近在から土錐や土師器壺などが比較的まとまって出土した。

SD 2 は SD 1 のすぐ南西を並行して流れ、やがて合流し SD 3 を形成する。SD 1 が下流に向って大きく成長したのに対し、SD 2 では南拡張区で幅約2.7m、深さ約0.8mと SD 1 を凌ぐ規模であったものの、中央拡張区に至ると浅いレンズ状堆積となつて SD 1 に吸収される。SD 1 と SD 2 に切り合い関係は確認できなかった。

SD 3 は SD 1 と SD 2 が合流し、SD 1 が主体となって形成された流れで、北拡張区では中央拡張区の規模を維持したままさらに北に向っているのを確認した。ただ、北拡張区では最上部の①層が、30cm前後の深さに拡散しており、SD 3 の埋没後に低平地を形成していたようである。

SD 4 は SD 1 ~ SD 3 とはやや距離を置いて、さらに西をゆるやかに蛇行して流れる溝である。幅約0.6m、深さ約0.5mを計り、断面はV字状を呈している。溝内の堆積土は、①黒褐色粘質土層、②砂礫層である。SD 1 と同様、溝底は礫による筋状の爪痕が顕著である。

以上、遺跡の西を流れる SD 1 ~ SD 4 の4条の溝

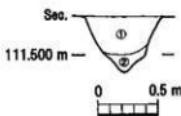
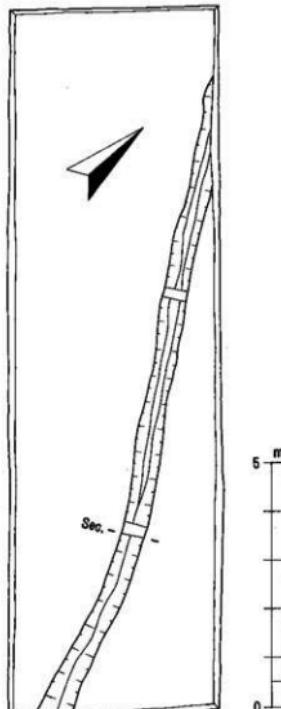


図19 溝 (SD 4)

について述べた。これらの溝は、東に広がる八反切の集落跡と西の低平地を画する意図で、人為的に掘開された溝であったと考えられる。

各溝とも出土遺物が少なく、また切り合い関係がないため、新旧関係は分かっていない。

【中世前期の遺構】

土坑（SK1）

調査区の北西辺近くで検出した直径 $0.8 \times 0.7m$ の円形に近い椭円を呈する土坑である。断面は深さ20cm余の浅いレンズ状で、黒褐色粘質土が堆積する。この中位より黑色土器片が出土した。今回の調査域で最も新しい中世前期頃の土器であり、遺構の下限を示すものである。

出土遺物

出土物は遺物コンテナで3箱程度と、調査面積の割には少量であった。土師器・須恵器や土錘、鉄釘などが出土し、古墳時代前期から中世前期頃までの時期幅がある。以下、土器類を中心に遺構ごとに概要を報告する。詳細については観察表を参照されたい。

木棺墓からは遺構の解説すでに触れたように、須恵器3点が出土している。24は短頸壺である。頸部に2本の沈線がめぐり、底部はヘラ削りを施している。25は二段三方透かしの有蓋高杯である。焼成時のひずみが大きく、脚端部・坏部がゆがんでいる。また、上段の透かしは貫通せず断面三角形に留まっている。26は焼成不良の土師質の短頸壺である。肩部から上ののみの破片で、頸部には1本の沈線がめぐる。

SB2ではP6掘方から土師器の壺13が出土している。黒色の煤が付着した茶褐色の受口状の口縁部破片である。

SB3ではP3・P8から土師器の壺・壺、P1・2・6・8から土錘が出土している。3は淡黄灰色を呈する土師器壺の口縁部で、口縁部に赤色顔料が塗布されている。52は土師器の壺と思われる破片で、斜めに立ち上がる体部から口縁部が直立している。4は土師器壺でかなり風化しているものの、灰白色の上に一部赤色顔料が塗布されている。3と同じものであろう。

SB4ではP2・P4から土師器・黒色土器・土錘が出土している。11・2・9・10は土師器壺で、いずれも淡黄灰色の胎土で、口縁部をやや厚めにして全体に赤色顔料が塗布されている。5は黒色土器壺の口縁部破片と考えられるもので、内面全体と口縁部外面の一部が黒色を、外面は黄褐色を呈している薄手の破片である。8の土師器壺は、淡黄灰色の胎土で口縁部をやや厚めにして全体に赤色顔料が塗布されている。

SB6では土師器の壺や須恵器の壺と思われる細片が出土している。SB7では圓化していないが須恵器壺の破片が出土している。なお、SB6・7周辺の検出面で18の須恵器坏身が出土している。底部の外寄りに直立する断面逆台形の貼り付け高台を有する破片である。

SB8ではP1からは須恵器の壺の胴部破片が出土している。内面に同心円状の叩き痕を留めている。SB9ではP1から須恵器の坏身54が出土している。斜めに直線的に立ち上がる薄手の口縁部である。なお、SB1・SB5では出土遺物は皆無であった。

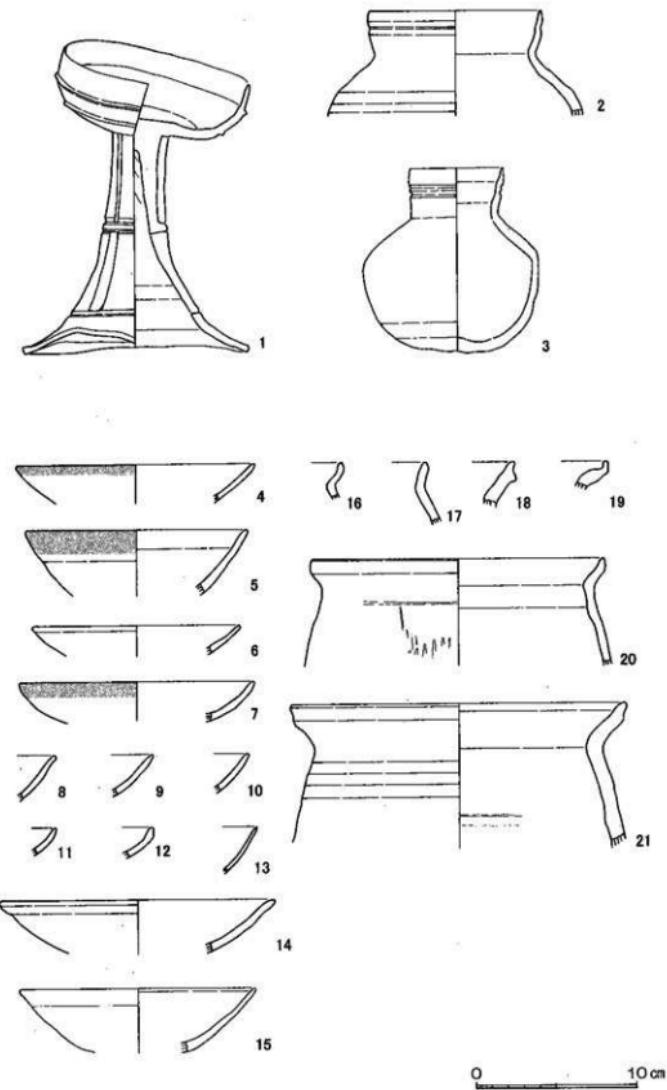
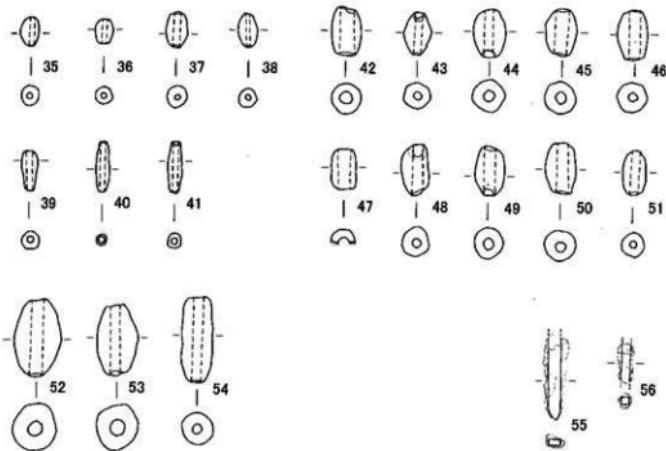
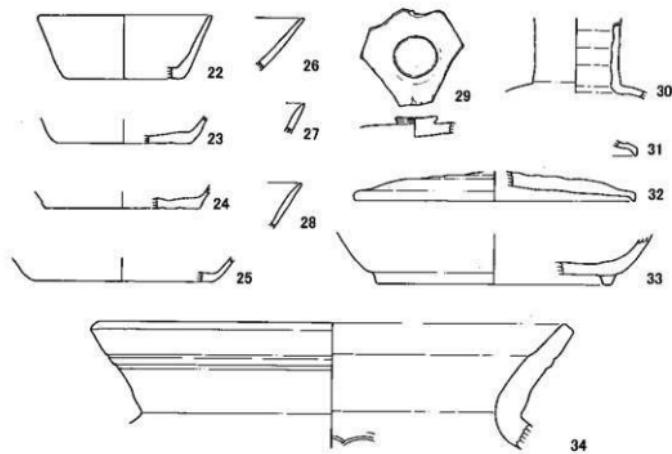


図20 出土遺物実測図（1）



0 10 cm

図21 出土遺物実測図 (2)

擲図 番号	出土地点	器種	器形	法量 (cm)		色調	備考
				口径	器高		
1	木棺墓	須恵器	高坏	11.5	19.0	灰褐色	
2	木棺墓	須恵器	壺	10.6	6.5~	淡黃褐色	焼成不良のため土師質
3	木棺墓	須恵器	壺	5.7	11.5	灰褐色	
4	SB3P8	土師器	壺	14.8	2.4~	淡黃白灰色	赤色顔料塗布
5	SB3P8	土師器	壺	13.8	3.9~	淡黃白灰色	赤色顔料塗布
6	SB4P4	土師器	壺	13.0	1.8~	淡黃白灰色	赤色顔料塗布
7	SB4P4	土師器	壺	14.6	2.5~	淡黃白灰色	赤色顔料塗布
8	SB4P4	土師器	壺	—	2.5~	淡黃白灰色	赤色顔料塗布
9	SB4P4	土師器	壺	—	2.9~	淡黃白灰色	赤色顔料塗布
10	SB4P2	土師器	壺	—	2.4~	淡黃白灰色	赤色顔料塗布
11	SD3中央拡張区	土師器	壺	—	1.7~	淡黃白灰色	
12	SD3中央拡張区	土師器	壺	—	1.9~	淡黃白灰色	
13	SB4P4	黒色土器	壺	15.0	2.9~	淡黃白色	内黒
14	SD3中央拡張区	土師器	壺	17.2	3.3~	淡黃白色	
15	SK1	黒色土器	壺	14.8	3.9~	淡黃白色	内黒
16	SB2P6	土師器	壺	—	2.3~	茶褐色	受口状口縁
17	SB3P8	土師器	壺	—	1.7~	茶褐色	
18	SB3P3	土師器	壺	—	3.9~	黄褐色	
19	SD3中央拡張区	土師器	壺	18.2	6.7~	茶褐色	
20	SD3中央拡張区	土師器	壺	20.8	8.5~	黄褐色	
21	SD3中央拡張区	土師器	壺	—	2.95~	黄褐色	
22	SD1中央拡張区	須恵器	壺身	10.6	4.0	灰褐色	
23	SD1中央拡張区	須恵器	壺身	10.4	1.6~	灰褐色	
24	SD3中央拡張区	須恵器	壺身	10.8	1.5~	灰褐色	
25	SX17	須恵器	壺身	13.7	1.4~	灰褐色	
26	SE9P1	須恵器	壺身	—	3.3~	灰褐色	
27	SD2中央拡張区	須恵器	壺身	—	1.9~	灰褐色	
28	SD2中央拡張区	須恵器	壺蓋	—	1.2~	灰褐色	扁平なつまみ有り
29	SX17	須恵器	壺身	—	2.8~	灰褐色	
30	SD3中央拡張区	須恵器	壺蓋	—	4.9~	灰褐色	長頸蓋
31	SD1中央拡張区	須恵器	壺蓋	—	1.0~	灰褐色	
32	SD2中央拡張区	須恵器	壺蓋	17.5	1.8~	灰褐色	
33	SB6・7周辺	須恵器	壺身	19.6	3.2~	灰褐色	高台
34	SD1中央拡張区	須恵器	壺	30.0	7.8	白灰褐色	

表2 出土土器一覧

擲図 番号	出土地点	法量 (cm)			色調	備考
		長さ	最大径	孔径		
35	SD1中央拡張区	1.75	1.20	0.30	白灰色	小型 玉状
36	SD3中央拡張区	1.55	1.15	0.30	白灰色	小型 玉状
37	SD3中央拡張区	2.15	1.45	0.35	白灰色	小型 やや中太
38	SD3中央拡張区	1.95	1.25	0.30	黒灰色	小型 やや中太
39	SD3中央拡張区	2.50	1.10	0.30	黒灰色	小型 中太
40	SD3中央拡張区	3.15	0.90	0.35	白灰色	小型 細筒状
41	SD3中央拡張区	3.20	0.95	0.35	白灰色	小型 細筒状
42	SB3P6	2.95	2.00	0.85	暗褐色	中型 やや中太
43	SB3P2	2.60	1.60	0.35	白灰色	中型 やや中太
44	SB3P6	2.90	2.25	0.70	白灰色	中型 やや中太
45	SB3P6	2.95	2.05	0.80	白灰色	中型 やや中太
46	SB4P4	3.05	2.05	0.70	暗褐色	中型 やや中太
47	SD3中央拡張区	2.55	1.60	0.75	白灰色	中型 やや中太
48	SD3中央拡張区	3.15	1.85	0.70	黒灰色	中型 やや中太
49	SB3P6	2.95	2.00	0.75	灰色	中型 中太
50	SD3中央拡張区	3.10	2.05	0.65	暗褐色	中型 中太
51	SB3P1	2.60	1.55	0.45	暗褐色	中型 筒状
52	SB3P2	4.70	3.05	0.80	暗褐色	大型 中太
53	SB3P1	4.40	2.95	0.90	白灰色	大型 中太
54	SB3P8	5.20	2.10	0.70	白灰色	大型 筒状

表3 出土土錐一覧

SA 1 では北端の柱穴を中心に須恵器の壺蓋、土師器が数点出土している。SA 2 では柱穴から数点の土師器・須恵器が出土している。いずれも細片のため図化には至らなかった。

SD 1 からは土師器・須恵器や土錐・炭片が出土している。19・53は須恵器の壺身で、19 の底部に粘土紐の巻き上げ痕が認められる。57は須恵器の壺蓋の口縁部の破片で、端部を下垂させて丸くおさめている。23は壺の頸部から上の破片で、口縁端部に面を有し、その直下に2本の沈線がめぐる。内面には同心円状のタキ痕が僅かにみられる。なお、23の体部とみられる大型の破片が何片か出土している。SD 2 からも須恵器の壺や土師器などが出土している。20・21は須恵器の壺蓋である。20は扁平なつまみを有する中心部の破片、21は中心部を欠損しているが端部を下垂させ丸くおさめている。56は須恵器の壺身の口縁部破片である。この他、土師器碗や須恵器壺の破片が出土している。SD 3 からは最も多くの遺物が出土しており、土師器・須恵器・土錐や鉄製品が出土している。16は須恵器の壺身、22は長頸壺の破片である。16の体部下端には板ナデの際のはみ出しがある。22は肩部に濃緑色の自然釉がかかる。6・50・51は土師器碗であり、50・51は赤色顔料を塗布しており、51は口縁端部が上方に立ち上がる。6は口縁部が若干肥厚し外反する。11・12・15は土師器壺で、11・12はくの字状の口縁を有する。15は口縁端部に凹みがみられる破片である。27・28は鉄釘と思われる。SD 4 では埋土から赤色顔料を塗布した土師器の細片数点が出土している。

SK 1 からは黒色土器碗 7 や土師器壺の体部の破片が出土している。

SX10 ではそこで検出した炭化物の間から土師器の壺と思われる細片が出土している。SX 17 では土師器や須恵器の破片が出土しているが細片が多い。そのうち17・55は須恵器壺身の底部と口縁部の破片である。

さて、土錐については前述のように掘立柱建物の柱穴や溝から出土しているが、形態からいくつかに分類が可能である。まず外形から玉状、中太、やや中太、筒状、細筒状に分けられる。また長さから大型(4.4~4.7cm)・中型(2.5~3.1cm)・小型(~1.5cm)、孔径から0.30 ~0.35cm、0.65cm~に分けることも可能である。このうち孔径は孔を通した魚網の太さと関連していると考えられる。SB 3 から SD 3 にかけて集中して出土しており、遺構の性格を考える上で興味深い。

以上の出土遺物の時期については、須恵器は TK209 型式にあたる 6 世紀末頃の古墳時代後期と、MT21 型式にあたる 8 世紀後半頃の奈良時代後半という二つの時期が認められる。土師器については壺の一部に古墳時代前期頃に遡る可能性がある可能性があるものもあるが、碗など大半は須恵器との共伴関係から奈良時代後半のものと考えられる。土錐についても同様であろう。なお、黒色土器が出土している SK 1 は中世前期まで時代が下がる可能性が高い。

IV おわりに

今回の調査により、古墳時代前期以降、中世前期頃に至る各種の遺構を検出した。特に古墳時代後期(6世紀末)の木棺墓と奈良時代後半の掘立柱建物群は注目される。木棺墓は单

体での検出であり墓域としての広がりは把握できなかったが、遺構の保存状態は比較的良好であり、供獻されたと推測される須恵器もまとめて出土した。当地の当時代における葬制の1資料を提示できたと考えている。

掘立柱建物は9棟を検出した。西側は溝を経て低平地が形成されており、この時期の集落は、調査地からさらに東に伸び、おそらく里道近くまで広がっているものと予想される。今回の調査で検出した掘立柱建物9棟は、SB1・SB8・SB9の建物群とSB2～SB7の建物群の2群が識別された。もちろん両群とも建物に重複があり、両群に時間的な幅を持たせた上で考える必要があるが、ともに一般的な掘立柱建物と総柱の掘立柱建物をセットとした建物構成が想起される。それは居住と備蓄（倉庫）という2つの機能をセットとする建物構成でもあるが、両群が時間の推移によるものか、それとも並存する2つの建物構成であったのか、現状では結論を出すまでに至らなかった。

なお、当遺跡の南東には木曾遺跡が広がっており、同期の掘立柱建物も多数検出されている。また、古代東山道の烏籠駅比定地も指呼の距離にある。これらの遺跡や史跡も取り込みながら八反切遺跡を歴史的に位置付けていくことが必要である。

出土した遺物では土鍤が注目される。SB3より9点、SB4より1点、SD3より10点の合計20点が出土しており、SB3・4からSD1とSD2が合流してSD3を形成する一帯に集中して出土したものである。形状は様々であるが、全体として小規模なものが多い。近くを流れる芹川などで漁労活動を展開していたことを物語る資料である。

〔主要参考文献〕

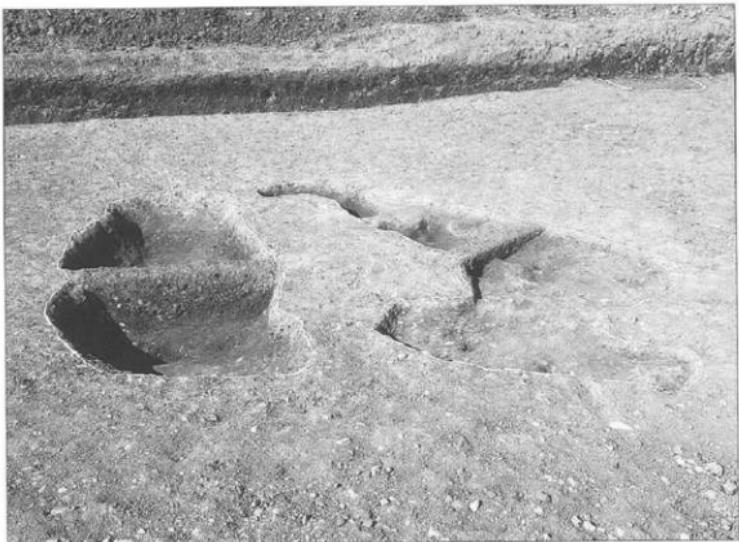
- 『松原内湖遺跡発掘調査報告書Ⅱ』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会1992
- 『烏籠山遺跡発掘調査概要報告書』彦根市教育委員会1992
- 『松原内湖遺跡発掘調査報告書Ⅰ』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会1993
- 『久御遺跡』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会1995
- 『木曾遺跡』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会1996
- 『木曾遺跡Ⅱ』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会1997
- 『木曾遺跡Ⅲ』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会1999
- 『木曾遺跡』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会2000
- 『平成十三年度滋賀県遺跡地図』滋賀県教育委員会2002
- 『木曾遺跡・土田遺跡・月ノ木遺跡』滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会2002
- 『彦根明治の古地図二』彦根市2002
- 『新修彦根市史編さんに伴う彦根市内遺跡・遺物調査報告書』彦根市史考古部会2004
- 『土田遺跡－第4次・第5次調査－』多賀町教育委員会2004
- 『土田遺跡－第10次調査－』多賀町教育委員会2005
- 『藤丸遺跡Ⅱ』彦根市教育委員会2005
- 『扇状地の考古学－愛知・犬上郡の古代文化－』(企画展図録) 滋賀県立安土城考古博物館2006



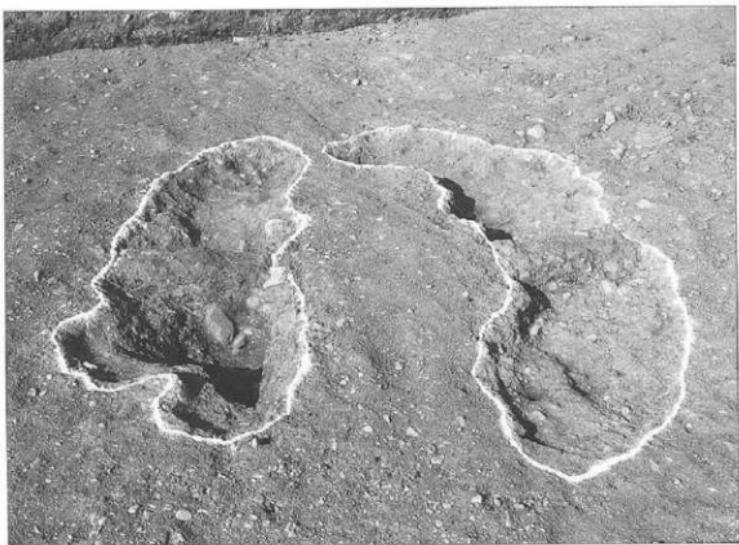
調査前風景〔東から〕



不定形土坑(SX1：右と SX2：左)〔西から〕



不定形土坑(SX3：左と SX4：右)【西から】



不定形土坑(SX5：左と SX6：右)【西から】



不定形土坑(SX10：後方と SX11：前方)【北から】



不定形土坑(SX10)で検出した炭化した板材【東から】



木棺墓出土状況〔北から〕



木棺墓完掘状況〔北から〕



木棺墓内須恵器出土状況〔東から〕



掘立柱建物(SB 1)〔南東から〕



掘立柱建物(SB 2)〔南東から〕



掘立柱建物(SB 3)〔北西から〕



掘立柱建物(SB 3 : 後方と SB 4 : 前方) [南東から]



掘立柱建物(SB 4) [南西から]



掘立柱建物(SB 5) [南東から]



掘立柱建物(SB 6)検出状況 [南東から]



掘立柱建物(SB 6) [南東から]



掘立柱建物(SB 6)西隅柱穴:P1より出土の根石 [北から]



据立柱建物(SB 6)南隅柱穴より出土の根石〔北東から〕



据立柱建物(SB 7)検出状況〔南東から〕



掘立柱建物(SB 7) [南東から]



掘立柱建物(SB 6:右とSB 7:左) [北西から]



掘立柱建物(SB 6：前方と SB 7：後方) 【南西から】



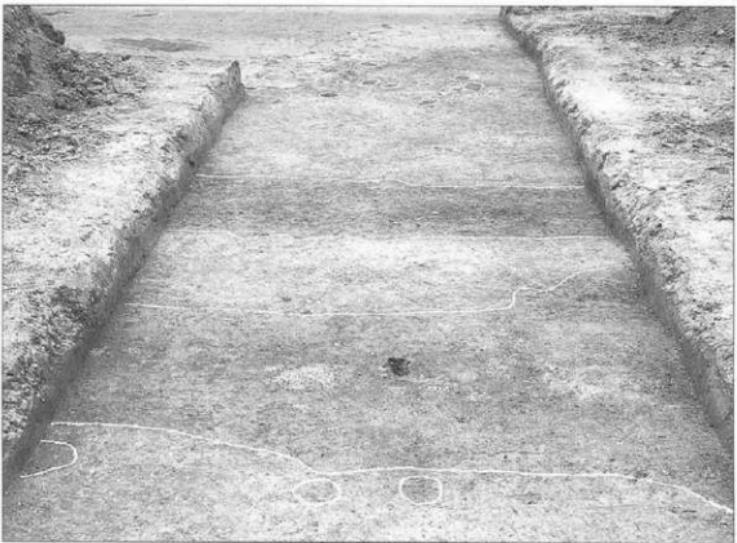
掘立柱建物(SB 8：左と SB 9：右) 【南東から】



柵(SA 1)〔北東から〕



柵(SA 2)〔南東から〕



溝(SD 1:後方と SD 2:前方)〔南拡張区・南西から〕



溝(SD 1) 〔南拡張区北壁・南東から〕



溝(SD 1) 〔南拡張区南壁・北西から〕



溝(SD 1) [中央拡張区南壁・北西から]



溝(SD 2) [南拡張区北壁・南東から]



溝(SD 2) 〔中央拡張区南壁・北西から〕



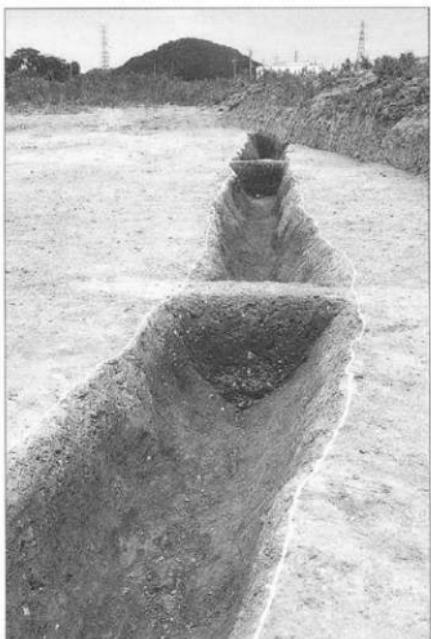
溝(SD 3) 〔中央拡張区北壁・南東から〕



溝(SD 3) 〔北拡張区北壁・南東から〕



溝(SD 4) 〔南東から〕



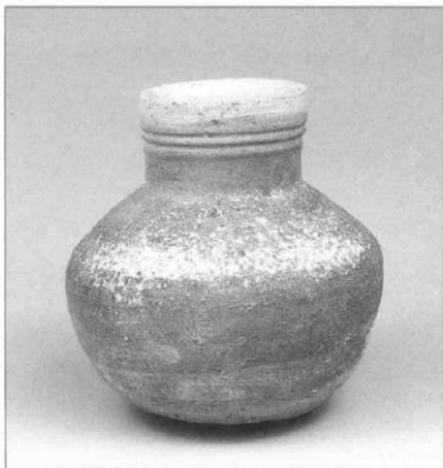
溝(SD 4)〔南から〕



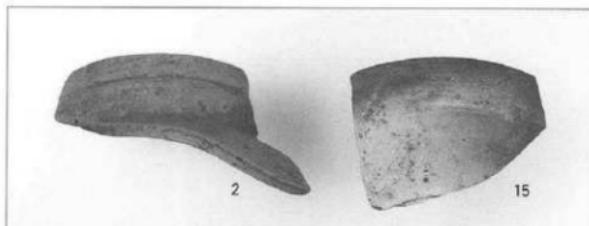
土坑(SK 1)内、黒色土器・土師器甌出土状況〔北から〕



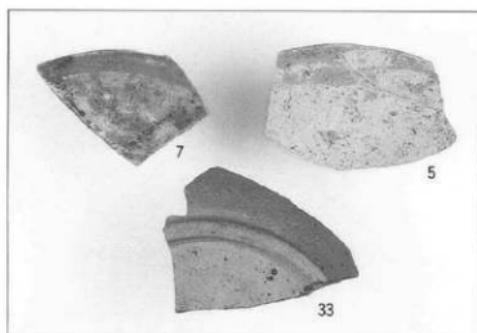
木棺墓出土土器(1)



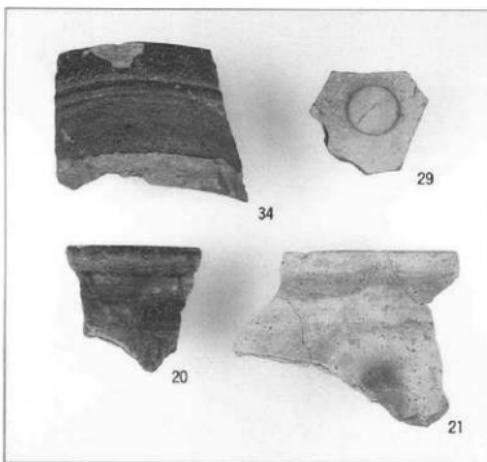
木棺墓出土土器(3)



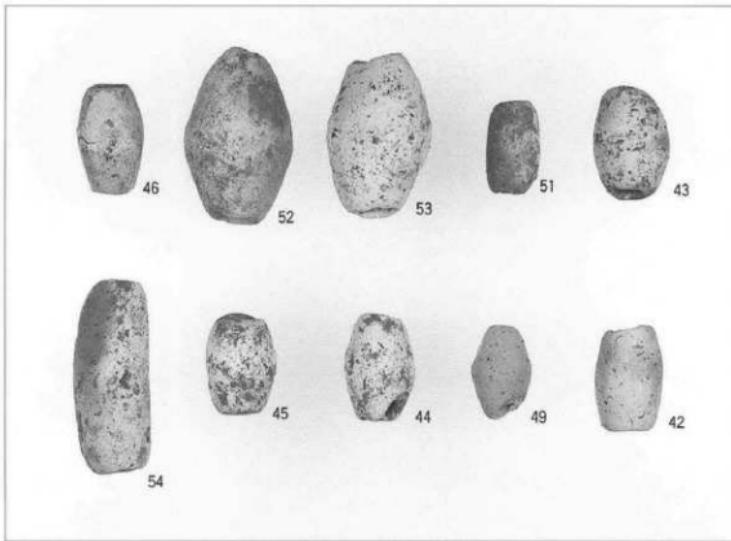
木棺墓出土土器(2) 土坑(SK 1)出土土器(15)



掘立柱建物出土土器



溝出土土器



掘立柱建物出土土錘



溝出土土錘

報告書抄録

ふりがな	はったんぎりいせき							
書名	八反切遺跡							
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書 第38集							
編著者名	谷口徹・早川圭							
編集機関	彦根市教育委員会 文化財課							
所在地	彦根市尾末町1番38号							
発行年月日	平成18年(2006年)3月							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はったんぎりいせき 八反切遺跡	彦根市 野田山町 字八反切 750-1ほか	25202	053	35度 14分 32秒	136度 16分 40秒	2,200 m ²	20050425 ～ 20051028	工場用地
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
八反切遺跡	集落	古墳時代 奈良時代	木棺墓 掘立柱建物 槽溝	土師器 須恵器 土鍵	木棺墓 掘立柱建物			

彦根市埋蔵文化財調査報告書第38集

八反切遺跡

—工場建設用地造成工事に伴う発掘調査報告—

平成18年(2006年)3月発行

編集・発行：彦根市教育委員会文化財課

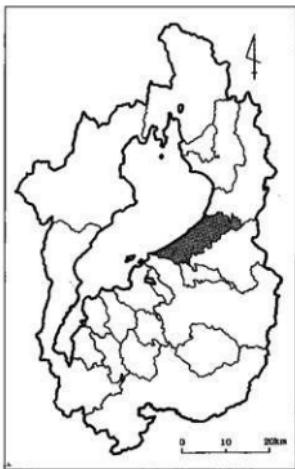
彦根市尾末町1番38号

Tel 0749-26-5833

印刷・製本：西濃印刷株式会社

岐阜市七軒町15番地

SITE OF HATTANGIRI



March, 2006

**Hikone Educational Bureau
Cultural Asset Division**